

Title	「かな」の位相：「多情多恨」表記考補遺：付表 「『多情多恨』における音象徴の語の表記形式一 覧」
Author(s)	玉村, 文郎
Citation	大阪外国語大学学報. 30 p.123-p.144
Issue Date	1974-02-28
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80510">https://hdl.handle.net/11094/80510</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 「か な」の位相

——「多情多恨」表記考補遺——

付表『「多情多恨」における音象徴の語の表記形式一覧』

玉 村 文 郎

## On the Use of Syllabaries in Koyo's "TAJOTAKON"

TAMAMURA Fumio

In my preceding paper, I analysed the onomatopoeic words in Koyo's "TAJOTAKON" that were written in KANJI. However, while Koyo attempted to express Japanese onomatopoeias in KANJI, he also wrote some of them in syllabaries; and the present paper examines the words in "TAJOTAKON" which were written in syllabaries.

- (1) Use of KATAKANA: It is quite natural that foreign borrowings, as well as echoic and exclamatory words, were written in KATAKANA. But on the other hand, for the words amongst these which were frequently used and tended to be written in KANJI by other writers too, Koyo used KANJI.

Apart from this he used KATAKANA to express prolonged syllables, the special syllabic stop, and the emphasized parts in sentences.

- (2) Use of HIRAGANA: He used HIRAGANA to express more than 60 onomatopoeic words (or "words of sound symbolism" from a lexicological view point). This fact tells us that even Koyo could not express all the onomatopoeic words by using KANJI alone. The more one tries to express these words in a way faithful to the natural sounds, the more one cannot help but use phonetic letters, such as syllabaries.

These words in HIRAGANA are evidence that he did not succeed in his wish to write completely in KANJI, which result could have easily been foreseen in the light of graphic theory.

In conclusion, Koyo's attempt, ending in failure as it did, stresses the fact that he was

himself a Japanese writer, and as such could not be freed from the reality in which Japanese language functions, with its very deep and very complex graphic problems.

Apart from this, Koyo's use of letters shows a clear difference from that of other writers. His usage of KANA alongside the KANJI must be recognized as a considerable achievement in visual effectiveness. The combination of meaning and sound can create a crystal-clear image for the reader. For the words written both in KANJI and KANA by Koyo, make crystal-clear what may be thought of as splendidly stratified images in the reader's mind.

## 目 次

- 0 はじめに
- 1 「かな」使用の歴史
- 2 明治初期の文学作品における「かな」使用の概観
- 3 紅葉「多情多恨」における「かな」
  - 3-1-1 漢字・平がな両表記例のある語
  - 3-1-2 漢字・片かな両表記例のある語
  - 3-2 平がな・片かな両表記例のある語
  - 3-3-1 片かな表記例のみの語
  - 3-3-2 平がな表記例のみの語
- 4 おわりに

## 0 はじめに

先に、「漢字をあてる」と題した小論（大阪外国語大學學報第29所収）において、尾崎紅葉の「多情多恨」の表記の諸相を概観し、そこに働いたと考えられる文字意識の分析をおこなったが、それは、主として紅葉が音象徴の語に漢字をあてるのにどれほど苦心したかの追跡的検討に終始し、漢字をあてられなかった語の性質などについては、多く論じ残した。

そこで、今回は、「多情多恨」の中の「かな書き」の語を中心に、「かな」の用いられた様相を検討してみたい。

## 1 「かな」使用の歴史

漢字が、文字の存在しなかったわが国に伝えられて、和語を表わすのに漢字が用いられるようになったとき、もっとも早く「漢字をあてられた」のは、多分固有名であったと推察される。地

名・人名のたぐいが、もっぱら音相を明示するために、漢字の表意性を捨象しつつ、表音的にのみ使われたということは、今日の中国語における外国の地名・人名の表わし方からも想像できるところである。この地名・人名（とくに神名）は、一般の語彙でないために、漢語に翻訳して表現されることを拒む性質の語類であった。こうして、おそらく、わが日本語の語彙の中では、固有名詞がもっとも早く「音仮名」に結びつけられていったと考えられる。例えば、「伊太加」「斯歸斯麻」などがそれである。固有名詞に意字としての漢字をあてるには、「和訓」というものの一定度の定着が、その過程に考えられなければならないはずであり、そのためには、わが先人の漢字に関する素養と慣習が数代にわたって蓄積される必要があったと考えられるのである。

しかし、「訓仮名」は、徐々にその量と質とを拡大深化させていった。このようなわが国における漢字使用の歴史の中で、「古事記」の文字化は、実に偉大な作業であったと考えられる。一安万侶の努力や創案だけでは決して「古事記」の記録化は達成するはずもなかった。それ以前の数知れぬ努力や工夫の集積の上に、まさに「古事記」の文字は世に出たと見られるべきであろう。

山田俊雄氏に、「漢語にはおきかえがたいもの——それは固有名詞であり、助詞・助動詞などである云々」との指摘があるが、先人が漢字の使用に熟達してくると、漢文をはなれて、和文を記録するために漢字を使うようになり、そこに必然的に、国語の語類や品詞についての一定の認識が生じ、その認識に対応した表記形態が考察されることになった。おそらく、固有名詞の「音仮名」による表記と、「宣命書き」に見られる用言の活用語尾・助詞・助動詞などの「小字表記」とは、発生時期の上では先後があったはずである。ここに付け加えるならば、前考「漢字をあてる」や前々考「紅葉『疊字訓』のうちとそと」で扱った音象徴の語も、その語形が同じく重視されるべきものであって、「塩許袁呂許袁呂」「内は富良富良外は須夫須夫」（以上 記上）など、「音仮名」による表記が早く見られる。

いずれにしても、以上のような漢字の表音的用法がつみ重ねられて、「かな」が成立した。「かな」（仮名）はその名のごとく、わが文字史の上で長らく、「漢字正字観」の下で、「臨時的」「私的」で、俗で、かりに用いられる文字と見なされてきた。そして、おそらくは現代においても、この伝統的な「かな観」は、ほとんどそのまま生きているであろう。

いわゆる「平かな」は普通単に「かな」と呼ばれ、「片かな」は「かたかな」と称されていた。「真名」と呼ばれた「漢字」に対しては、上の二者は「かな」と呼ばれる文字としての共通性をもつが、後者は前者に対するとき、「まともでない、不完全なかな」として意識され、符号的な「かな」であったと言われる。<sup>(注2)</sup>この「片かな」の補助的性格は、明らかに現代日本人の言語生活においてもうかがえるところである。擬声語や、まだ十分日本語の語彙体系の中に入り切っていない外来語、あるいは、文中で強調され印象づけられる語句、電報文などに用いられ、さらには、漢字・漢語・外国語につける表音符号として使用されているのである。この「片かな」と比べる

と、「平がな」は、はるかに高い文字としての安定性を示し、今日普通におこなわれている「漢字・かなまじり文」の柱となっている。

以上の歴史的概観をふまえて、明治初期の文学作品における「かな」使用を概略見たのち、「多情多恨」の中の「かな」の様相を見ていきたい。

## 2 明治初期の文学作品における「かな」使用の概観

前章において、漢字・平がな・片かなの使用の大勢から結論づけられるそれぞれの文字としての性格をのべたが、それはどこまでも一般的傾向であって、〈文字についての教育が体系的でなく、用法上の規制などのなかった〉江戸から明治にかけての時期では、かなり多様な文字づかいが見られる。なかでも、文学作品では、作家の好み・学識・創作意図などに応じて、思い思いの文字づかいが展開されているのが見られる。

明治初期のいわゆる「戯作的文学」では、江戸時代戯作者流の文字づかいが特徴的である。「浮世風呂」や「梅暦」流の表記が、「西洋道中膝栗毛」(明3～)、「安愚楽鍋」(明4)、「春雨文庫」(明9)、「鳥追阿松海上新話」(明11)などに連綿と続いているのが容易に感じられる。そこでは、応答詞や感動詞、接続助詞の「ト」、終助詞の「ヨ」、擬声語、外来語などを「片かな」で表わすほか、引き音節を示すために「イ」「ア」などを用い、促音を「ツ」で表わしたりするほか、文中で強調される特定語句をしばしば「片かな」によって示すという表記慣習がとられている。ただ、時代の進むにつれて、徐々に「片かな」の減少傾向が見られるが、これも文体その他との関係が深く、簡単に云々することはさしひかえねばなるまい。

これらに続く「斉武名士経国美談」(明16)や「佳人之奇遇」(明18)は漢文訓読的な文語体であるためか、「片かな」はほとんど用いられず、わずかに固有名詞の一部が「片かな書き」にされているか、固有名詞にあてられた漢字のルビとして「片かな」が用いられているにとどまる。

こういう表記法や用字法といった面では、むしろ「雪中梅」(明19)や「浮雲」(明20)が、明治初期の前掲作品との明確なつながりをもっていることがわかる。

「平がな」については、特に言及してこなかったが、「漢字・かなまじり文」が定式化するにつれて、「漢字」にそえる文字としての「平がな」の位置は安定に向かっている。明治初期は、特に、漢字・漢語がその地位を高めた時期であって、自立語(用言にあってはその語幹)はほとんど「漢字」をもって表記される傾きが強かった。したがって、その余の付属語と用言の活用語尾は、自然「平がな」によって示されることとなったわけで、その方式は現代の表記法の根幹ともなっている。

他方、文学作品から目を転じて、明治10年ごろの新聞などを見ると、「漢字・片かなまじり」が普通で、「平がな」は、雑報(一般ニュース)や投書・雑文等にしか用いられなかったようである。ちなみに紹介すれば、新聞における「漢字」と「かな」の使用率については、ほぼ6対4

となるようである。

### 3 紅葉「多情多恨」における「かな」

前考「漢字をあてる」で考察したように、尾崎紅葉は、同時代の作家の中でも、もっとも強い漢字趣味をもち、漢字の選択、漢字による表記に苦心を重ねた作家である。その紅葉が、音象徴の語に「漢字をあてる」ために払った努力は実に大きいものであったと考えられる。にもかかわらず、その作品の中では、かなり多くの語を「かな書き」にしている。そのことは、どう解釈したらいいであろうか。紅葉にとって、「かな」がどんなものであったかを、「多情多恨」からとり出した例をもとに考えてみよう。

#### 3-1-1 漢字・平かな両表記例のある語

- (i) 音象徴語 あゝ、うむ、ぐい(と)、ぐつと、ずつと、つい、はた(と)、はつと、ぱつと、ふと、ゆつくり など
- (ii) その他 はい(諾・はい)、これ(是・之・此・これ)、それ(其・それ)、その(其・爾・その)、そこ(其處・そこ)、なるほど(成程・成程・果然・なるほど)、やつぱり(同然・依様・依然・依舊・猶且・仍舊・やつぱり)、やはり(依然・依様・猶且・仍舊)、ない(無い・ない)、ゐる(居る・ゐる)、もし(設・若し・もし) など

以上のうち、(i)は本考末尾の付表によって知られるとおり、多くは「平かな」表記が優勢なようである。しかし、「ふと」(不圖)、「ずつと」(直と)などの、慣用により安定した漢字表記形式をもつ語をふくんでいる。(ii)は、語によって、若干のちがいはあるが、多くは漢字表記形式が主流となっているものである。「無い」「ない」については、前者が「存在否定」を、後者が「動作・状態否定」を表わしている場合が多いように見うけられる。

#### 3-1-2 漢字・片かな両表記例のある語

上衣(コート)・コート、手巾(ハンカチーフ)・ハンカチーフ

ここに挙げられる語は、きわめて少なく、上記2語ぐらいである。それは「漢字・平かなまじり文」の中では、当然のことながらであって、上記2語も、本来は、単一表記形式であるべきものが、不用意に別表記にされたものであろう。

なお、ここに付記するならば、次の例のように、文字面では同一でありながら、ルビによって、別語であることが示されている場合がある。

外套(オーバーコート・ぐわいたう)、栓(コーク・せん)、窄袴(ツボン・パンツ)、朋友(フレンド・ともだち)

### 3-2 平がな・片かな両表記例のある語

同一語を「平がな書き」「片かな書き」の二様に書き表わした例も、当然のことながらない。このことは、「かな文字」としての両者に共通する性質があるために、もともとどちらか一方で書いた上に、さらに他方で書くということが、本質的な不統一となるという事実と、なお、「漢字・平がなまじり文」の中では、本来的な表記手段として位置づけられている「平がな」と対照されて、どこまでも、補助的臨時的な表記手段である「片かな」の位置が十分鮮明に意識されるという事実から、この二者を用いて同一語を両様に表記することは、大体において、自然に避けられたはずであるから、至極当然のことであった。（もし、こういう両様表記例があったとすれば、それはなんらかの意味で、強調特立を必要としたために、あえて別種の表記形式がとられたと考えるべきであろう。）

しかし次のように、同一の外来語の不安定な異形態を、両様に書いている場合がある。

メリンス                  めれんす

この場合の「片かな」「平がな」の使い分けには、なんら積極的な理由を見いだすことはできない。表記形式にきわめて神経質であったと言われる紅葉にして、なおこういう不用意な不統一の例を残してしまっていることは注意しておいていい。

なお、「多情多恨」では、外来語の表記に二種の方式が見られる。「片かな」のみによるものと、「漢字」に「片かな」ルビを施したものの二方式である。このことについては、次項で扱う。

#### 3-3-1 片かな表記例のみの語

##### A 外来語

カステラ、コツプ、シオール、スープ、ステツキ、ソツプ、バケツト、ビスケツト、ヒンドスタニイ、ヒンドスタン、ピンヘツド、ブツク、ブランデー、フランネル、プロフエッサァ、ポートフォリオ、ボストン、ホテル、モーニング（コート）、モール（細工）、ランプ、ワツプル、キンドウ

概括的に言うならば、以上のような「片かな」だけでしるされた語は、いわゆる外来語として、当時「片かな書き」が普通であったものと、ヒンドスタン（——ニイ）、ボストンのように、次にかかげる「歐羅巴（エウロツパ）」とはちがって、わが国では漢字のあてられることがはるかに少なかったものである。ただし、この外来語の表記に関しては、同時代の作家の表記の一般を、あわせて調べるべきであるが、未調査であるため、確言はさしひかえない。

「キンドウ」は、ことさら外来語を借りなくてもいい語である。作品の中では、学生用語として用いられている。

外来語については、また先に挙げた「歐羅巴（エウロツパ）」のように、漢字面にルビとしての「片かな」を振った表記形式が顕著である。

加答兒（カタル）、硝子（ガラス）、葉巻（シガア）、胴衣（チョツキ）、食刀（ナイフ）、無（ナツシング）、白銅（ニツケル）、備忘録（ノートブック）、煙管（パイプ）、帽子（ハット）、麥酒（ビール）、肉叉（フォーク）、遍縷（ヘル）、内君（マダム）、燐枝（マツチ）、鍍（メツキ）など

これらは、先の「カステラ」以下の「片かな」だけで書かれた語と、どんな点でちがうのであろうか。まず、「歐羅巴」「加答兒」「遍縷」のような音訳語があるという事実と、さらに、

外套（オヴーコート・ぐわいたう）

栓（コーク・せん）

朋友（フレンド・ともだち）

のような、一つの主表記に語形表示としてのルビが二様に振られている例がまじっているという事実とを考えるならば、これらは全体として、少なくとも当時の紅葉にあっては、漢字と結びつけやすいものであったと言える。また、紅葉のはなはだしい漢字趣味からすれば、まず視覚的に文字が意識されていて、それが場面場面ですまざまな語形（それは多くルビで示される）をとって現われたのだとも推測される。こういうことがらは、多分「総ルビ」という方針であったと思われる「多情多恨」の中に「接吻」（ルビなし）のごとく、時にルビがなくては、よみを決しかねるような例のあることを見てもうなずけるのである。しかし、3-1-2に挙げた「コート」「ハンカチーフ」の「漢字・片かな両様表記」にも見られるような、不用意としか考えられない不統一な表記を見れば、ここまで立ち入った微細な吟味は、特に字数・語数の多い中・長編小説の場合にはひかえなければならぬかと思う。

## B 音象徴語

スポン〜と鳴る、チリレン ツンテン ツトチン〜、ツ、ンツン〜、ツトチン〜、トン（と）、パチン（と）など

一見してわかるように、これらはほとんどが直接的な模写音である。典型的な「片かな」の用法の一つである。

## C 補助的符号

ここに、語ではないが、ルビの中では常に、そして、主表記中でも時に、語の一部である促音節を示すために「片かな」ツが使われていることを報告しておこう。

ルビ表記

蒼然（うツとり）、落膽（がツかり）、轟然（によツぱり）、爆然（ばツ〜）（と言ふ）、發矢（はツし）、屹（きツ）と、鍍（メツキ）など

主表記

あゝツ、あツ、はツはツはツ

もっとも、主表記中では、促音節は「ごつとり」「ほつたり」のように「平がな」で表わされ



ているのが普通である。

### 3-3-2 平がな表記例のみの語

「漢字・平がなまじり文」であるために、助詞・助動詞・用言の活用語尾が常に「平がな」で書かれているのは当然のことである。今、音象徴の語で、促音節を除き、「平がな」で書かれた用例ばかりの語を挙げてみる。

あゝツ、あツ、あら、あれ、うか〜、うんともすんとも、えゝ、えへ、えへん、おい〜、おほん、おろ〜、がたりみしり、がちやん、がぶ〜、がぶり、ぎよろり、ぐう（の音）、ぐつすり、くぶり〜、くる〜、こそ〜、こつそり、ごつとり、ごほ〜、ごろり、（ラムプは）じい〜、じろり〜、しんねりむつゝり、すう（と）、すや〜、たつぷり、たらし、ちぶり〜、ちやきり〜、ちやはや、ちよつぷり、づしりばたり づしりばたり、づらり、どつかり、どつさり、のめ〜、はた〜、ばた〜、ばたり、はたり〜、ばちり、はッはッはッ、ばつたり、ばつたり、ぴしやり、ぴしり〜、ひよろ〜、ひり〜、ふむ、ほう（と）、ほたり、ぼつ〜、ほつたり、ぼつたり、ほり〜、めら〜、やい〜、わい〜

以上のように、音象徴の語の「平がな書き」はかなり多い。「片かな書き」が10例にみえないのに比べると、こちらは60例をこえていて、その多くが、自然音の直接的な描写ではない、いわゆる「擬態語」であることに注目すべきである。前考でも指摘したとおり、紅葉がこの「擬態語」に漢字をあてることに腐心したあとが歴然としているが、その紅葉でさえもなおこれだけの「平がな表記」をおこなっている点は、どう理解すべきであろうか。それは、この種の語に多い異形態の個々を音相（語形）に忠実に表現しなければならなかったからである。語の性質上、その音相の正確な表記を実現しなくては、作品のいのちともいうべき描写そのものを犠牲にしてしまうことになりかねないのである。もちろん、前考・前々考で指摘したように、紅葉の創作の基本態度としては、漢字（または漢語）による表記にねらいはあったわけであるが、その計算の剰余というか、矛盾の顕在化というか、結果として、「かな書き」を残さざるを得なかったのである。ここに、本来、漢字によってはついに表わしきれない和語の面目がある。とりわけ音象徴の語に多い「長音化」「濁音化」「半濁音化」「促音挿入」「撥音挿入」などの「表情化」の手続きは、到底漢字によって実現しきれものではない。

表現に多大の苦心を重ねた紅葉の困惑は、したがって、原理的には出発点から十分予測されたはずであった。われわれは、紅葉の実作を仔細にながめればながめるほど、そのなやみの深いひだを見、その呻吟を聞く思いがするのである。

## 4 おわりに

「多情多恨」における「かな書き」の語を中心にして、「かな」の使われているさまざまな様

相を見てきて、作者紅葉のきわめて個性的で創意にみちた表記上の試みの数々が観察できた。しかし、そういう個人の努力やいとなみの背後に、個人の到底あらがうことのできない日本語という言語の性格のカベがあることも、同時に十分観察されたはずである。「かな」をめぐる多くのことから、本考冒頭の1の記述の枠の外に出るものではなかった。ただ、紅葉の表記態度、特にその音象徴語、わけても「擬態語」の表記にうかがえる態度には、明らかに他の作家とことなるものがあつたことは指摘しておかなければならない。それは、主表記の漢字と傍記ルビの「かな」とが、主従のかたちで見事一体となり、表現の重層化がはかられたと考えられる点である。

表記全体を論じるには、外部的には、他の作家の作品や紅葉の他の作品との比較が、また内部的には、補助記号としての「おどり字」やノ？…などをもふくめた全面的な考察が、ともに必要であるが、今回は「多情多恨」中の「かな書き」の語に限って検討した。ひきつづき続考を準備したい。

（あとがき） 「多情多恨」の表記を調査するにあたって用いたのは、中央公論社刊「尾崎紅葉全集」第五巻である。

なお、引用文中の〰は、「おどり字」である。印刷の都合上、やむなく横書きの体裁となったため、不本意ながら、本来縦書き用の「おどり字」をそのまま横組みとした。

また、印刷の便を考えて、原文のルビは、漢字の直後の（ ）の中におさめることとした。

最後に、付表として、以下に、『『多情多恨』における音象徴の語の表記形式一覧』をかかげることとした。この付表は、前考・前々考の基礎資料の一部である。

注1 山田俊雄「国語の文字の変遷」(124ページ)(国語教育のための国語講座第3巻「表記法の理論と教育」所収)なお一々ことわっていないが、小考の1の部分については、この論文から多くのものを得ている。

注2 山田俊雄「前掲論文」(134・135ページ)

注3 国立国語研究所報告 15 「明治初期の新聞の用語」(253ページ以下)

付 表

「多情多恨」における音象徴の語の表記形式一覧

○表記形式はすべて中央公論社「尾崎紅葉全集」第五卷所収の本文によった。

○語の配列は、語基の五十音順にしたがった。

○表の各項は次の順で成っている。

①見出し（本文のかな表記による）

②表記形式（漢字形式・かな形式の順に配列）

③所在ページ数（改造社版「現代日本文学全集」VI『尾崎紅葉集』におけるページ数）

○副詞語尾としての「と」は、語義判断のつく場合は省いた。

○語義のわかりにくそうな場合には、適宜当該語の前後の語句を（ ）内に摘記した。

○音象徴の語とは考えられないが、参考のために挙げたものには、見出し語の頭に＊印を施した。

あゝ

吁 2, 4, 8, 18,25, 25, 34, 101, 110,  
110, 118

唉 3, 6, 53, 117, 120,122, 122, 125

噫 4, 53, 73, 93, 99, 100, 106, 123,  
123

嗚呼 2, 93

あゝ 2, 4, 4, 6, 7, 12, 13, 16, 18,  
19…

あら

あら 36, 82, 83

あれ

あれ 35, 35

あわてふためく

慌て忙めいて 116

いき〜

活潑 108

あゝッ

あゝッ 80

いそ〜

急速 4, 87

嬉々 83, 104, 115

あたふた

焦燥 37

忙々 82

周章 115

\*いよ〜

斷然 50, 56, 59, 63

逾 91

愈 7

愈々 7, 119, 119

彌 7, 14, 14, 42,53, 67, 70, 108,  
108, 126

彌々 4

あッ

あッ 8

あッさり

淡白 115

いよ〜 20, 22, 92, 93

あやふや

曖昧 49

いら〜

苛々 123

\*いろ〜  
種々 4, 19, 72  
百方 5, 21, 57  
いろ〜 71

うか  
漫然 75, 120  
不覺 82

うか〜  
うか〜 26

うじ〜  
忸怩 60

うづ〜  
勃々 37

うツかり  
漫然 44, 57, 68, 69  
偶然 33

うツとり  
曹然 3

うつら〜  
忪々 25  
昏昏 106

うね〜  
起伏 20

うむ  
諾 21  
うむ 20, 41, 55, 83, 83, 92, 97,  
118, 132

うろたへる  
狼狽(へ)る 13, 76

うん  
呟 26  
呬 117

うんざり  
自失 78

うんともすんとも  
うんともすんとも 81

えい〜  
曳々 117

えゝ  
えゝ 72

えへ  
えへ, えへ, えへん 83  
えへ, えへん, おほん 63

えへん  
えへ, えへ, えへん 83  
えへ, えへん, おほん 63

おい〜  
おい〜 27

おほん  
おほん 63

おろ〜  
おろ〜聲 50

がさ〜  
簌々 63

がたりみしり  
がたりみしり 25

がちやん

がちやん 86  
かつと  
赫と 27, 131

がツかり  
落膽 52

かつきり  
剗然 33

がば  
岸破 56

がぶ〜  
がぶ〜 88

がぶり  
がぶり 65

がら〜  
檻々 97

からり  
廓然 33  
憂然 63  
鏗然 50

がらり  
脱然 38  
醜然 125

きち〜  
軋々 63

きちん  
端然 16  
整然 66

きツと

屹と 6, 7, 10, 16, 31, 48, 54, 70,  
72, 88, 90, 97, 101, 106, 123  
屹度 10, 72, 72, 72, 79, 127, 132  
必然 49  
佗と 118, 121, 121, 122

きツぱり  
決然 21, 110  
斷然 131

ぎよツ  
慄然 9, 58, 63, 121  
愕然 68

きよと〜  
瞿々 58

ぎよろり  
ぎよろり 26

ぎら〜  
的皦 25

きらめき  
炫耀 25

きらり  
炳然 36

きりツ  
氣凜 4, 27, 49

ぐい  
呬 2; 呬(服) 103  
佗 94  
ぐい 32

ぐい〜  
呬々 118  
ぐい〜 31

ぐう

ぐうの音 74

くさ〜

鬱々 16, 28

くしゃ〜

咀嚼 20

くす〜

吃々 23, 29, 119

くすり〜

吃々 13

ぐつと

呷と 68, 85

ぐつと 82

ぐつ〜

沸々 67

ぐづ〜

遅々 24, 33, 39, 60, 65, 67

暗々 49, 75, 100

くツきり

割然 104

ぐつすり

ぐつすり 12, 124

ぐツたり

委靡 25, 33

くど〜

媿々 118

くびり〜

くびり〜 10

くよ〜

快々 8, 55, 95

くり〜

盱々 70

くる〜

くる〜 (と帯を解いて) 33

くるり

一轉 83

\*くれ〜

懇々 39, 78

けは〜

歴々 (と濃い) 26

こそ〜

こそ〜 45

ごた〜

雜然 81

こつ〜

蹣蹣 25, 28, 51, 51, 80

こつそり

こつそり 37, 51

ごつとり

ごつとり 125

ごほ〜

ごほ〜 126

ころり

鞞然 65

ごろり

ごろり 16

さゞめく  
嘈く 77

さゝらぐ  
瀬ぐ 118

ざつと  
畧と 33

さつさ  
匆々 67, 80, 81, 93

さつぱり  
全然 22, 29, 32, 55, 124, 130  
淡泊 116  
爽快 38

さめ〜  
漃々 9  
漉々 134

\*さま〜  
種々 95, 105

じい〜  
じい〜 (ラムプは——) 63

しかと  
確乎と 107

\*しげ〜  
凝然 8  
繁々 3

\*しづ〜  
徐々 51

しツかり

確乎 43  
佗然 89

しツくり  
四合 98, 104, 117

しどろに  
亂次に 50…

\*しみ〜  
諄々 14  
染々 19  
懇々 60  
浸々 9, 66, 129  
浸潤 90  
沁々 101  
しみ〜 85

じめ〜  
津濕 124

しやんと  
端然と 19

しよぼ〜  
蕭々 12

しよんぼり  
悄然 12, 101, 118  
愁然 31, 127

じり〜  
憤悶 49

じろり  
瞥然 86

じろり〜  
じろり〜 5

しを〜

悄々 3

憔悴 95, 95

萎々 132

しんと

森と 40

しんねりむつゝり

しんねりむつゝり 16

ずいと

衝と 70

すうと

すうと 49, 87, 87

すゞろに

不覺に 91

すた〜

蹀躞 24

蹀躞 100

ずつと

直と 26, 74, 77, 83, 112

ずつと 87

すツかり

全然 9, 58, 67, 82, 133

釋然(解つた) 60

すツぱり

全然 4

スポン〜

スポン〜(と鳴る) 81

すや〜

すや〜 125

すらり

織削(とした) 11

ずんぐりむつくり

豊々腴々 24

ずん〜

侃々(する) 39, 39

ずんど

直截 88

せい〜

奄々 33

(霽々) 123

せか〜

焦躁 4

せツせ

精々 13, 26, 32, 33, 79, 124

ぞうツと

悚然と 18

ぞくり〜

肫々(と惡寒く) 2

\*そこ〜

倉皇 17

匆々 18, 64, 104, 111

そゝくさ

倉皇 35

そゞろ

不覺(——心, ——に) 53, 65

そツと

徐と 97



窃と 13, 34, 37, 72, 75, 85, 86,  
 86, 101, 125, 125  
 ぞツと  
 悚然と 13, 18, 23, 42, 53, 63, 131  
 悽然と 72  
 慄然と 78  
 そツくり  
 全然 56, 125  
 そよと  
 習と 25  
 習々と 13  
 そろ〜  
 漸次 15, 52  
 徐々 99  
 ぞろり  
 披々(とした) 115  
 たつぶり  
 たつぶり 87  
 たらり  
 たらり 7  
 \*たんと  
 多度 3, 42, 103  
 たをやか  
 嫵娜 104  
 \*ちぎれ〜  
 斷々 93  
 ぢツと  
 熟と 10, 14, 29, 42, 44, 50, 55,  
 63, 71, 75, 84, 85, 93, 110,  
 122, 124, 131, 132  
 昵と 13, 17, 22, 30, 34, 37, 69, 85,  
 88, 88, 94, 117, 121, 127  
 凝然 18, 63  
 沈と 95, 119  
 ちツと  
 些と 29  
 ちつとも  
 ちつとも 84, 89  
 ちびり〜  
 ちびり〜 69  
 ちやうど  
 丁度 9, 41, 65, 86  
 丁ど 112  
 ちやきり〜  
 ちやきり〜(と缺の音) 26  
 ちやほや  
 ちやほや 28  
 ちやんと  
 整然と 31, 56  
 端然と 49  
 歷然と 59  
 瞭然と 127  
 丁と 37, 57  
 ちよい〜  
 往々 46  
 ちよツと  
 瞥と(見る) 15  
 一寸 4, 4, 5, …129  
 ちよつぱり

ちよつぴり 83

ちら〜

隠顯 25

ちらり〜

隠顯 81

ちらつく

隠顯いて 6

陰顯いて 129

チリレン ツンテン ツトチン〜

チリレン ツンテン ツトチン〜 85

ちんと

端然と 29, 38, 38, 72

秩然と 81, 109

チン〜

チン〜 (鐵瓶が〜いつて) 37

ちん〜 (沸く) 64

ちんからり

鏘然鏗然 50

ちんまり

秩然 114

つと

衝と 3, 49, 50, 67, 81, 86, 101,  
115, 130

つい

不知 6, 37, 107

つい 10, 89, 106, 124, 126

ついと

衝と 5, 79

つい〜

蘊々 (と) 37

つか〜

従々 37, 71, 97

つく〜

熟 36, 36, 53

熟く 95, 127

反復 79

凝然 105

つくねん

兀然 67, 104

づしりばたり, づしりばたり

づしりばたり, づしりばたり 31

ツ、ンツン

ツ、ンツン 85

ツ、ン ツン〜 チツチリン チリレン

ツンテン ツトテン〜

ツ、ン ツン〜 チツチリン チリレン

ツンテン ツトテン〜 85

ツトチン〜

ツトチン〜 85

\*つや〜

潤澤 13

艶々 104

づらり

づらり 34

つん

昂然 66, 85, 92

てツきり

切當 43

どき〜

悸々 46

ときめく

衝跳いた 67

悸きつゝ 91

どく〜

滾々 7

どツと

颯と 2

颯と 63

どツか

撞乎 33

どつかり

どつかり 20, 81

どツきり

衝跳 38

惕息 128

どつさり

どつさり (と<sup>もた</sup>靠れる) 6

トンと

丁と (肩を——と打つて) 18

トンと (胸に<sup>こたへ</sup>應がある) 82

どんと

丁と 17

とん〜

丁々 63

どん〜

滔々 70

とん〜

丁々々 63

にこやか

溫容 77

にっこり

莞爾 76

によつぱり

羸然 20

のこ〜

跼蹐 12

踽々 72

のそ〜

遅々 113

\*のび〜

暢々 93

のめ〜

のめ〜 50

はたと

礧と 50

はたと 63

はた〜

はた〜 (物音) 63, 118

ばた〜

ばた〜 (と駈け) 17

ばたり

ばたり (物音) 63

はたり〜

はたり〜 (雨漏) 118

ばかり  
ばかり（と剪むで） 26

パチン  
パチン（と） 104

はつと  
呀と 116, 121  
はつと 10, 17, 18, 27, 62, 83

ばつと  
莽然と 59  
ばつと 31

ばツ〜  
爆然（と言ふ） 23

はツはツはツ  
はツはツはツ 124

はツきり  
發揮 28, 79  
判然 79

はツし  
發矢（と） 63

ばつたり  
ばつたり（と坐る） 49, 121

ばつたり  
ばつたり 50

ばツちり  
洞然 119  
盱然 129

はら〜  
惴々 22  
悚々 75

潸々（と涙を） 49  
潸々（と涙を） 132

ばら〜  
紛々 22

ぴう  
颺（と） 37

ぴう〜  
颺々 24

ぴか〜  
ぴか〜 59

びく  
蠢然（とも） 86

びく〜  
憂懼 75

ひしと  
犇と 65, 132

ひし〜  
緊々 65

びし〜  
犇々 23

びし〜  
犇々 74

ひしめく  
犇く 19, 124, 128

びしやり  
びしやり 82

びしよぬれ

漚々濡（に） 2	ひよろ〜 114
びしり〜	*ひよんな
びしり〜 62	異變な 4
ひそ〜	ひり〜
密々 50	ひり〜 117
びツくり	ふいと
吃驚 32, 49, 49, 49, 60, 67, 79,	飄然と 23, 51
79, 79, 79, 86, 115, 130	ふいと 26
可驚 67	ふいと
びツしり	飄然と 35
聾り 34	
びツしやり	*ふさ〜
闕然 63, 126	縁々 98, 104
ひツそ	ふツと
閑寂 64	弗と 3, 52, 62, 87, 114, 126
	突如と 85
ひツそり	ふと
閑寂 35	不圖 4, 6, 19, 36, 58, 88, 91, 95,
閑然 81, 120	124
ひよいと	弗と 53, 100
趑然と 14	ふと 62, 65
ひよこ〜	ふむ
趑々 100	ふむ 71, 81
ひよツこり	ふら〜
突然 31	揺々 26
趑然 69	
ひよツと	ふらり
偶然 101	飄然 67, 114
ひよろ〜	ふんと
	芬と 5, 38, 73

ぶん〜

芬々 63

べたん

平坦 (と) 33

へどもど

周章狼狽 19

ほう

ほう (感動) 117

ほう (と息を吹く) 3

ばかり〜

煦々 20

ぼた〜

滴々 94

ほたり

ほたり (と涙を) 12

ぼたり〜

滴々 2

ぼつ〜

徐々 57

ぼつ〜

ぼつ〜 88

ほツと

味と 56, 63

咄と 115, 123

吻と 19

ほつたり

ほつたり 62

ぼつたり

ぼつたり 34

ぼつん

孑然 29

ぼり〜

ぼり〜 (頭を掻く) 22

ほろ〜

點々と (涙を) 2

滴々 (と落して) 31

ぼんと

惘然と 17

惘然 52

ぼんと

劈然と 8

ぼんやり

惘然 2, 19, 35, 52, 67, 96, 100

惘然 4, 110

茫然 9, 27, 44, 64, 86, 133

模糊 40

遲鈍 37

陰々 (ラムプ) 65

孑然 54, 55, 56

漠然 73

まご〜

狼狽 49

まごつく

狼狽 (——だらう, ——された) 73, 87

まざ〜

顯然 1

まじ〜

墨々 19, 30, 73

耿々 63

兀々 84	忸怩つい（一て，一た） 22, 36
みしり	もだ〜
みしり（がたり——） 25	悶々 83
むく〜	や
蠢々 101	や 7, 82
むしやくしや	やい〜
蒨蘊 31, 122	やい〜 16
むツと	やきもき
艴然と 6, 36, 45, 64, 64, 130	鬱勃 25
怫然と 26	やんはり
むづ〜	軽々 20
蠕々 99	ゆつくり
むつつり	緩慢 17
怫然 22	綽然 131
木訥漠（人） 87	御寛縦（ご——） 20
むつゝり（しんねり——） 16	ゆつくり 44
めき〜	ゆる〜
着々 79	寛々 93
めら〜	ゆるり
めら〜 25	暢然 115
もじ〜	よぼ〜
忸怩 21, 49, 111	疲曳（の老父） 105
踟蹰 63	わい〜
もじつく	わい〜 83